救った功勲者として認められたことを意味した。東学農民戦争という危機は、羅州地域の郷吏層にとって地域社会における自らの地位を大きく強化する重要な契機になったのである。

（2）義兵と郷吏

甲午改革による地方制度および財政制度の変化は、羅州の郷吏層を圧迫した。このような状況の中で閔妃が殺害され断髪令が発せられると、全国各地で義兵蜂起の動きが現れ、羅州の士族や郷吏の間にも義兵蜂起の機運が高まった。

羅州は 1895 年 5 月の地方制度の改変によって牧から観察府にかわった。それに伴って 1895 年 5 月 29 日に初の観察使として韓耆東が就任したが、6 月 20 日に辞職し、6 月 19 日には安宗洙が参書官に任命されて 7 月 26 日に着任した。安宗洙は開化派官僚であった。

親日的官僚集団が推進していた甲午改革の地方制度および財政制度改革は、郷吏層の存立基盤を脅かすものであった。安宗洙は開化派の人物という点だけでも、羅州の士族や郷吏にとって排斥すべき対象になった。しかも彼は、赴任後の数カ月間、8 万両という巨額の金を集めたという風説が出回るほど、富戸に対してほしいままに略奪を繰り返した。その上、安宗洙が断髪令を強いると、羅州の士族や郷吏層は憤り始めた。

羅州義兵蜂起の直接的なきっかけをつくったのは奇宇萬であった。奇宇萬は 1896 年の旧正月に倡義計画を立て、1896 年 1 月末に彼の通文が羅州郷校に伝わった[15]。ところが、羅州郷吏層では奇宇萬の通文が届くはるか前、東学農民戦争当時に都統将として羅州を守り抜き手柄を立てた戸長の鄭錫珍によって、義兵蜂起の準備が整えられつつあった。3 月 21 日（旧暦 2 月 8 日）、再び湖南の 50 邑に送る奇宇萬の通文が長城の義所から羅州に届いた。羅州義兵は 3 月 22 日に安宗洙とともに削髪を主導した 3 人の官吏を殺害した[16]。羅州義兵の構成員のほとんどは両班の儒生や郷吏で、義兵将は士族の李鶴相であった。しかし、羅州の儒生による義兵蜂起を推進し、義陣が整えられないうちに参書官の安宗洙らを殺したのは郷吏層であった。羅州義兵の蜂起準備は外向きには郷校を中心に進められたが、当の倡義所が郷吏の執務所である椽吏庁に設置されたことから郷吏層が義兵を主導したことがわかる[17]。また、義兵に参加した郷吏は事実上東学農民戦争当時、守城軍の中心人物でもあった。ところが、政府から解散を慫慂される中、4 月 4 日に奇宇萬が羅州を離れ、8 日に宣諭使と親衛隊が派遣されると、解散し始める。4 月 23 日には羅州義兵の背後で糸を引いていた海南郡守の鄭錫珍が任地で逮捕され、羅州城外で梟首になった。4 月 12 日に前潭陽郡守の閔宗烈が全州監營兵隊によって羅州に押送されると、1896 年の羅州義兵は消滅した。守城の時とは異なり、郷吏側としてはかんばしい結果とはいえなかった。後期義兵蜂起に参加しなかったのもある一面ではこれと関連している。

1907 年以後、義兵が全国規模で蜂起すると、統監府は郡面単位の自衛団の結成を要求

15 『錦城正義録』병편、109 ～ 113 頁。
16 『錦城正義録』병편、121 ～ 124 頁。
17 『錦城正義録』병편、126 頁。

する。しかし、羅州地域の自衛団の組織化は順調に進まなかった[18]。やがて、1909 年 2 月 25 日に羅州地域の主要郷吏家門の人々が中心になり、羅州郡民会が組織された。彼らの掲げた目標は教育の普及を期すること、実業の発達をはかること、愚民を勧諭・就善すること、外交上の敦厚をはかることなどであった[19]。郡民会を結成したのは、自衛団創設を要求する日本官憲の圧迫を回避しながら、義兵との極端な衝突や対立を避けようとする意図からであった。

なお、羅州の郷吏層と義兵の間には極端な対立はなかった。むしろ義兵に加わるよう勧誘する文章が送られたこともあった[20]。一進会や自衛団を仇敵のように考えていた義兵も羅州方面では不思議なほど寛大であった。このようなやりとりは、1896 年の義兵蜂起の教訓もあり、この時期の義兵と羅州の郷吏層が極端な敵対関係になかったこと、お互いに依然として親密な関係を続けていたことを示唆する。この他にも郷吏層の一部が義兵に協力していたことを示す状況もあった[21]。

1896 年の義兵蜂起が郷吏側に打撃を与えたために、羅州郷吏層は郡民会を組織したが、これは義兵との極端な対立を回避すると同時に、自衛団創設を要求する日帝官憲の圧迫もある程度受け流しながら、自分たちの官職進出や社会経済的活動を安定して維持しようとする意図からであった。

3　日帝下における羅州郷吏出身者と地方有力者

（1）羅州頤老会　羅州の有力者

1925 年には羅州頤老会が郷吏層を中心に結成される。役員の多くが羅州の郷吏家の出身であった。頤老會の目的は養老親善、地方青年の教育に努めること、矯風正俗、境内の貧民生活事業を研究すること、そして地方の発展に尽力することであった[22]。参加したのは総勢 244 名であった。人物の貫郷について分析すると、金海金氏が 29 名で最も多く、続いて密陽朴氏 22 名、慶州崔氏 21 名、密陽孫氏 16 名、羅州羅氏 12 名、宜寧南氏 12 名の順となっている。彼らのほとんどが韓末郷吏家門の出身であった。

羅州頤老会が結成されたのは 1925 年 2 月である。同会が結成された歴史的背景を見てみよう。

1924 年末から 25 年頃は青年会の革新運動が本格化した時期であった。各地域の既存の青年会は大地主・富豪までも取り込んで、主に文化・啓蒙活動をしながら、地域名望家や一部の新興有力者層の紐帯を強めた。しかし、青年会の革新運動はまず大地主・富豪といった層を青年会から排除し、会議の運営方法も会長制から執行委員制に転換させ、活動の内

18 『自衛團에 관한 編冊』1908 年 2 月 26 日、‘起案 自衛團 組織에 관한 제 5 회 報告按要’。
19 『한국독립運動사 자료 13 의병편 6』1909 年 3 月 2 日、624 頁。
20 「107. 羅秘發 第五二號」隆熙 2 年 2 月 27 日、『한국독립運動사자료 9 의병편 2』。
21 「127. 全國에 있어서의 폭도피해 및 其情況」『한국독립運動사 자료 13 의병편 6』424 頁。
22 『羅州頤老會案』。